

## 021年9月12日 第8回オープンミーティング報告

2021年9月12日、オンラインで運営委員会をした後、公開のオンライン・ミーティングを開催しました。

テーマ： p4c で変わる授業

報告者 森本 和夫（枚方市小学校教員）

司会 金澤 正治（西宮市小学校教員）

時間 午後3時～午後4時30分

参加者は基調報告者と司会以外は、運営委員3名、一般の参加8名、の計13名

### 概要

自己紹介

発表要旨

- ・ p4c が軌道にのるとよく話す子
- ・ 対話するが中心の授業
- ・ 教師がわかりやすく説明すると、途端につまらなそう。教師の分かりやすい説明こそいらないのでは？
- ・ 極力話し合いがいい。
- ・ 説明は止めよう。
- ・ それぞれの教科でどうするかを工夫。（例えば、算数では問題の解答を最初に教える。それで、どうしてそのような解答が出てくるのかを話し合う）
- ・ 教師の役割：試合に例えれば、「監督」ではなくて「観客」。子どもが選手。
- ・ Zoomでの授業でも子どもたちは勝手に、画面上の友だちに話しかける（事前に p4c をしているので慣れている）
- ・ 子どもが話をしたいということは、教師と子どもとの間のコミュニケーションができていないとできないのではないか。
- ・ これが、授業かどうか、というのが気になる。
- ・ しかし、指導書などを参考にして授業をすれば、誰かの借り物を利用しているだけなのではないか。
- ・ 自分に何もないことに気がついた。

### Q&A

Q：話し合いの場がすでにできていなければ、紹介されたような授業はできないのではない

か。信頼がなければできない。

A：教師を捨てられるか。子どもに対して、教師として話すのか、森本として話すのか。本音で話す、そうしなければ、子どもも本音で話してくれない。p4cをやることで、つまり本音で語ろうということでスタートしているので、教えられることが多い。しかし、これが難しい。

Q：どうしてp4cをすれば、本音で語られるのか。

A：何も教えることがないから。例えば、将来の夢はというような話の中で、子どもからなんで先生になったん、とよく聞かれるが、先生になる気は全くなかった、というような話をする。こういうところから、子どもとの会話が進んでいくのを楽しむ。先生が好きでやっているわけではないよ、というと、子どもも、そうだよなー、僕たちだってそんな好きで学校に来ているわけではないし、という返事が返ってくる。

Q：オンラインは一斉授業。円形にはできない。学びの質は破壊されているのではないか、などと考えていて、具体的な授業の話が聞いて良かった。こういう授業のやり方をしていると異端児に見られる。

A：p4cをやった時点ですでに異端児。これが授業かと言われる。しかし評価者は子どもと保護者なので、他の先生に向けてではなくて、子どもたちに対する目線で授業をしている。子どもたちが授業してもらいたい。子どもたちに授業するのではない。こういう気持ちをもてるようになるのに、10年かかった。

Q：宮崎：どうしたら、子どもたちが授業ができるようになるのか。

A：子どもたちに、自分が話すこと、そして他の人の話を聞くことが楽しいと思うようになってもらう。先生がちゃんと教えてくれないから、俺たちがしっかりしないとという覚悟までさせる。

Q：子どもの問題意識はどこにあるのか、子どもから話していくのが大事だと思う。実際に授業を見てみたい。先生は「観客」という話だったが、先生の役割はあるのではないか。例えば、参加者同士をつなぐ。最初はそれが必要ではないか。

A：つなぐこと、観察、観客ではなくて、観察すること。教師には観察力が大切。休み時間は職員室で一人なので、子どもが授業中にしゃべっていることから子どもたちの様子を見て取る。そこから生活指導につなげる。よく聞くこと。授業中に教師が話すこのことはできない。

Q：準備しないと行ったが、そんなことはないのではないか。子どもに話をさせるための手立てが必要ではないか。

A：何を中心に準備するか。分かりやすい授業を準備するのではなくて、ここで話したら面白いな、ここで子どもたちは反応するのではないか、ということを考えて発問や教材を考え

る。わかりやすく教えるための準備ではない。一斉授業のための準備ではない。

Q：道徳をやる際に、p 4 c である場合、教科書は使わないのか。

A：教科書は使う。教科書の作品を読んで、最後の方に書いてある問題について話す。そこから派生してくる問いを話し合う。いきなり、問題を話し合うようにしていく。教科書を離れていることはある。

Q：教科書にある価値観を発見させるのか。そういう感じではないのか。

A：教科書に出てくる問いを先ず話し合う。そこから展開。教科書の価値項目から発展していくことはある。

Q：道徳の所見。評価の記述をどうするか。

A：子どもの書いてくれたこと・記録をもとにしている。ビデオを取ってはいるが、それを見直すことは難しい。

Q：小学校と中学校とは違う。なかなか時間が取れない。どういう風に授業を進めていくのが子どもに分かりにくい。体育では話し合いを入れる。普通は技能重視で、子どもは戸惑っている。持ち回り授業なので、道徳もやり難い。子どもの対応がパターン化してしまっている。

A：工夫は、全員に話ができるようにしていく。ちょっとだけでも、自分のことを語らせる。このことによって、いろいろな発見が生まれて、突っ込みもいれていく。その過程で対話が生まれていく。

Q：同じ体育でも、内容に応じてやり方を考えている。ダンスなどはp 4 c が使いやすい。

A：例えば、跳び箱などでは、子どもたちが勝手に教え始める。できる子が教えてあげていく。フラットな関係が基礎になっているのでこのことが可能になる。p 4 c では何が得意ということはない。苦手なことに頑張っていると、手伝ってあげようという関係が生まれていく。人に教えることは楽しい。教師ではなく、子どもが教える。特に体育の場合は、教師が教えることに問題が生じる場合がある。

Q：これはいいねというようなことは板書するのもいいのでは。

A：教師が立って板書するとなると、教師は参加者ではなくなる。傍観者になってしまう。気になった言葉を画用紙に書いて、真ん中に置くということをしたこともある。ボードをもたせて書くようにさせると、ひたすら書くことに専念する子が出てくる。今はひたすら聞くことにしている。自分と子どもたちの感覚が大切。教師もフラットである必要がある。面白いという感覚が強くなっていく。それでも、教師と子どもの関係がどうであるかに影響される。

Q：保育園では生活の中での授業をしていく。自分が話すのが楽しい、聞くのが楽しい。